

内裏地区・内裏東官衙地区の調査

－第138-2次

1 はじめに

市道の拡幅と路肩整備にともなう事前調査。調査区は、藤原宮大極殿跡の背後を東西に走る市道が、醍醐池東方で幅を狭める地点で、藤原宮内裏中心部のやや東寄りに位置する。市道をはさんで、幅4～6m、東西総延長118mにおよぶ調査区で、既調査で検出した内裏東外郭をなす南北掘立柱塀SA865をまたぐ。調査区は4区に分かれ、北西から東へA～D区と呼称する。面積は合計約559m²。調査は2005年11月7日に開始し、2006年1月24日に終了した。

A区の東隣接地は、22次（1977年度）調査で、身舎梁行3間で四面廂をもつ東西棟掘立柱建物（SB2230）のほか、東西掘立柱塀2条（SA2231・2232）、東西石組溝（SD2233）などを検出している。また、B～D区は隣接する調査区こそないものの、図60に見るように、南方で61次（1990年度）・4次（1971年度）・58次（1987年度）、北方で55次（1987年度）の各調査があり、掘立柱塀や南北溝が未調査区をはさんで確認されている。

2 検出遺構

基本層序

調査区の基本層序は、表土下に水田の堆積層である①黄灰色～灰褐色の砂質土がある。現在の地盤は醍醐池の堤防により西方で高いため、①層は西方で厚い。その下層は、A区で残りが良く、その他はほぼ①層が後述する整地層付近まで及んでいる。

A区では①の下層に、藤原宮期の整地土と考えられる②明茶色～暗灰色の粘質土、さらにこの下層には、やはり藤原宮期の整地と考えられる④灰褐色～暗褐色の粘質土がある。④層は鉄分が沈着した赤褐色斑があり、固い面をなしている。この下層は基本的には地山（淡黄緑灰色シルト）だが、藤原宮以前の遺構の埋土である黒褐色粘質土が部分的に広がっている。この藤原宮以前の遺構は、A区に限らず付近の調査でもよく確認されている。

B区では、①の下層に、東西砂溝とそれに伴う氾濫原と考えられる③灰色砂層があり、その下は④層によく似た土層があるものの、炭片が入ってしまがないなどや

や様相が異なり、④層は削平もしくは比較的古い時期に擾乱を受けているらしい。C区の西半はB区とほぼ同様だが、③層が東大溝SD105の氾濫原に伴うと考えられる点で性格が若干異なる。C区東半およびD区はわずかに③層があるものの、①層下が④層である。

遺構の多くは、④層上面で明確に検出できなかったため、④層を除去して検出した。B区やC区の西部では、③層を除去したのち、遺構を検出した。検出面の標高は、D区で71.0m、B区西部で70.3m、A区石組溝底石で70.5m、西部で70.3mである。

A区の遺構

東西棟SB2230 A区の東部で検出した建物の西南隅で、桁行3間分、梁行2間分にあたる。廂の西南隅柱は後述する南北石組溝SD10422の下になるため検出できなかった。22次調査の測量に錯誤があり、厳密な遺構の位置を特定できないが、22次調査写真と現地の地物との対照に加えて、後述する東西石組溝SD2233の南北位置や東西棟SB2232の柱間寸法を勘案すると、廂を含めた桁行全長は8間になるとみられる。今回の調査区だけでは柱間寸法は明確でないけれども、桁行および身舎梁行が約2.1m（7尺）、廂の出が約2.3m（8尺）という22次の成果にほぼ合う。西妻の廂柱に残る柱根は、断面八角形で径は約20cmある。柱根は④層上で確認したが、掘形は検出できず④層除去後に確認した。

東西棟SB2232 22次調査で東西塀と解釈したSA2232の西延長部、東西2間分を検出した。柱抜取穴に入頭大の石が入るのが特徴である。柱間寸法は約3.0m（10尺）。調査区の西部まで続かないため、22次の解釈を訂正し、建物の北側柱と考えた。22次の成果とあわせると、桁行は7間以上になる。調査区東壁の土層観察から、柱穴掘形は④層を切り込み、抜取穴は②層上から掘っている。また重複関係からSB2230より新しい。なお22次調査で検出した東西塀SA2231は、今回の調査区には現れず、やはり建物の北側柱と考えられる（SB2231）。SB2232との重複関係は明確でないが、規模をやや違えて建て替えた可能性がある。

東西溝SD2233 22次調査の西延長部。側石は抜き取られており底石のみを検出した。復元できる溝幅は約30cm。22次ではSA2232（今調査のSB2232）と同時期と解釈していたが、重複関係からそれより新しい。

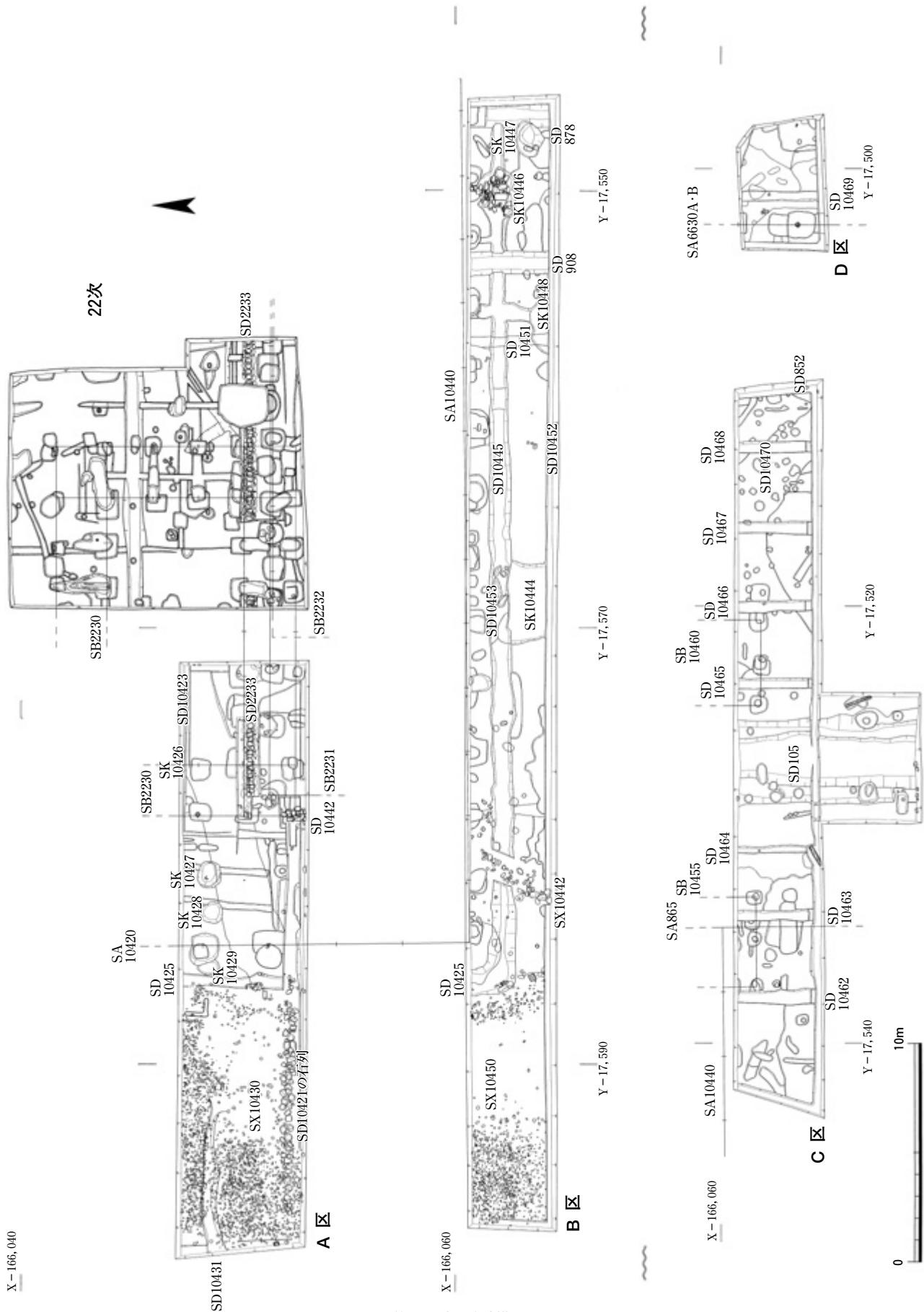


図70 第138-2次調査遺構図 1:250



図71 A区全景（西から）



図72 B区礫敷（西から）



図73 C区全景（東から）

南北溝SD10422 調査区東方の南壁際で検出した南北石組溝。人頭大の側石と底石を残し、溝内には瓦が散在する。溝の内法（側石間の距離）は、約30cmで、深さは約10cm。東西溝SD2233と交わる付近やその北方で玉石（底石）を検出し、SD2233とT字形に接続して北に延びると考えられる。

南北堀SA10420 調査区中央付近を南北に横断する堀で、1分間を検出した。柱間寸法は約3.1m。掘形の一辺が約1.2mと大きく、検出面からの深さは70cmある。市道南方のB区に延びる。掘形は④層を除去して確認した。抜取穴にはそれぞれ完形の平瓦を含む。

南北溝SD10425 SA10420の西方にある素掘りの南北溝。溝幅は約50cm、検出面からの深さは5～10cmで、護岸に貼石を施していた可能性がある。市道南方のB区に延びる。④層を除去して検出。

石敷SX10430 A区西寄りに広がる石敷で、拳大の石を敷きつめている（図71）。④層上につくられ、なかには傳や瓦も含み、また石敷の下層からも瓦が出土する。北寄りの位置には、東西溝状のやや低い部分（SD10431）がある。SD10425の西方にはらまかれた状態で、上面の凹凸が大きく舗装とは考えられない。また池の護岸のような斜面をなさず、池状の堆積物もないことから、庭園に伴うものとも想定しがたい。神社の神域内にまかれた玉砂利のような様相である。なおA区南辺部には平安時代の東西砂溝SD10421があつて、人頭大の石が落ち込んでおり、溝底面が石敷SX10430の上面とほぼ同高になるが、溝の石を一部残してSX10430を確認した。

土坑SK10427～10429 A区中央やや北寄りにあって、東西にならぶ土坑3基。平面径は約1m前後だが、検出面からの深さは90cmと深い。いずれも古墳時代前期の土器数点がほぼ完形で出土した。埋納遺構の可能性がある。これらの東方で北壁にかかる土坑SK10426も同性格の遺

構だろう。このほかA区では、藤原宮以前の斜行溝SA10423のほか、小穴などを検出した。

B区の遺構

A区から続く遺構のほか、未調査区を挟んで南方の4次（1971年度）・58次（1987年度）、北方の55次（1987年度）の各調査区で検出した遺構の延長部を確認した。

B区は、①層が厚く堆積し、その下に藤原宮期の遺物を含む東西溝SD10441が調査区南半をほぼ縦断している。遺構の検出はこの溝をすべて除去しておこなった。北半には④層がわずかに残る。B区西部に残した斜め方向に並ぶ石群SX10442は、この溝に伴う遺構だが性格は不明である。

東西堀SA10440 B区北壁にかかる東西掘立柱堀。A区の南北堀SA10420がL字形に折れて東西堀となったもので、十字やT字には接続しない。柱間寸法は約2.9m。東で北に若干振れており、柱穴規模はSA10420なみに大きいと考えられるが、東方ほど調査区内にかかる面積が小さく全容が明確でない。C区へのび、後述する南北堀SA865とT字形に接続する。

東西溝SD10445 A区の南北溝SD10425南延長部が東に折れて、B区を東西に縦断する溝。溝幅は60～90cm、深さは東方では20cm程度だが西方では浅くなる。埋土には流水堆積による砂層があり、瓦片を含む。C区には現れず、B区とC区の間で南に折れると考えられる。南方を調査した4・58次では、この位置に藤原宮直前期の南北溝SD6682を検出しているが、幅1.5mとやや大きく、同一の溝かどうか検討を要する。

礫敷SX10450 B区西寄りに広がる礫敷。B区北辺部では、A区の石敷SX10430から続く拳大の石を用いるが、それより南方、すなわち東西堀SA10440より南方は、径の小さな礫敷で様相が異なる（図72）。礫がない部分にも礫の抜取痕跡が見え、ほんらい南北溝SD10425西方は一

面に礫敷だったと考えられる。

大土坑SK10444 B区中央付近の南壁にかかる土坑。粗砂を埋土とし、加工痕のある木片が層状に堆積していた。深さ1.0m。瓦片を含み、東西溝SD10445より古い。

土坑群 B区の東部には土坑がいくつもある。SK10446は、基壇外装に用いたと想定される長辺70cmの凝灰岩塊のほか、人頭大の石や土器片・瓦片を投棄しており、東西溝SD10445より新しい。SK10447はB区東南隅付近にかかる土坑で、やはり石が数個投棄されている。検出面からの深さは40cm余と深い。SK10448は南壁にかかる土坑で、炭や土器片を多量に含む。出土遺物はいずれの土坑も藤原宮期である。

南北溝SD878 B区東壁付近で検出した素掘りの南北溝。4・58・55次調査でも検出した藤原宮に先行する藤原京の条坊・東一坊坊間路の東側溝である。溝幅は1.1m、検出面からの深さは40cm。

南北溝SD908 SD878より溝心心間距離で約7m西方に位置する素掘りの南北溝。先行条坊・東一坊坊間路の西側溝で、溝幅は約1.0m、検出面からの深さは約30cm。なお、東一坊坊間路の路面の舗装等は検出できなかった。また4・58次で検出している、SD878とSD908の中間にある南北溝SD907も確認できなかった。

このほかB区では弥生～古墳時代の溝SD10451～10453ほか、小穴などを多数検出した。弥生～古墳時代の遺構は石敷SX10450の下層からも検出される。

C区の遺構

C区では、B区からつづく遺構のほか、南方の61次(1990年度)、北方の55次調査で検出した遺構の延長部を確認した(図60)。後述する東大溝SD105は、多量の藤原宮期の遺物を含み、とりわけ土器に関しては、編年の指標としている重要な遺構である。このため、調査区を南方に拡張して調査資料の充実を図った。

南北溝SA865 C区西方で検出した柱穴1基。61・55次等で検出した内裏東外郭を区画する南北溝SA865の延長部である。既調査で判明している柱間寸法2.95m(10尺)から求められる想定柱位置とほぼ合う。掘形の一辺が約1.5mと大きく、東西に長い抜取穴をもつが、検出面からの深さは60cmとやや浅く、掘形にも炭片を含む。B区の北壁に沿う東西溝SA10440の延長部がC区北壁際にも現れ、柱間3.0m(10尺)でSA865に取りつく。なおC区で検

出した東西溝SA10440の柱穴にも炭片を含む。

東大溝SD105 C区中央付近で検出した南北素掘溝。61・55次調査ほかで確認している藤原宮の基幹水路で、今回の調査区で検出した溝幅は約4m、検出面からの深さは70cm前後を測る。東西の護岸に柱もしくは杭の柱穴や柱根(SX10458・10459)がある。埋土のうち中・下層は、流水により砂や木屑が層状に堆積し、また数度の浚渫が認められる。その中に④層で整地し、バラスを敷いて舗装している。バラス敷きの上には流水に伴う灰色砂が堆積しており、埋められた後も溝として機能していた。灰色砂はこの周囲にも氾濫原状に広がっている。④層は藤原宮期の整地と考えられ、SD105は藤原宮存続時に埋められている。溝の中層(バラスの下)には藤原宮期の土器を多量に含む。

南北棟SB10455・SB10460 SB10455は、SA865の北方にあって東西に並ぶ柱穴3基。SB10460は、東大溝SD105東方で検出した東西に並ぶ柱穴3基。いずれも柱間寸法は2.1m(7尺)で、南北棟建物の南妻と考えておく。南北位置がほぼ同じため同時期か。

南北溝SD852 C区東端で西肩を検出した南北溝。埋土に人頭大の石を含み、若干蛇行する。61・55次調査で検出した平安時代の溝の延長部である。

このほかC区には、東半部で検出した蛇行する幅約3mの溝SD10470をはじめ、藤原宮以前の小穴や溝が多数ある。なお、C・D区で東西約3.6mおきに掘られた南北素掘小溝SD10462～10469は、④層より新しいが③層より古く、藤原宮期もしくはその直後まで遡る可能性がある。これらは南方の61次調査でも検出している。

D区の遺構

南北溝SA6630 D区西寄りで検出した柱穴。平面は一辺1.2mの隅丸方形で、検出面からの深さは約80cm。径27cm、長さ73cmの柱根を残す。D区北壁にみえる柱穴がこれと対になるものと見られる。また、この柱穴に切られる方形の穴は、掘形のみで抜取穴をもたない。既調査成果から、東方官衙には南北に並ぶ同じ大きさのブロックが3つあることが判明しているが、SA6630は、このうち中央ブロックの西辺を画する溝である。南方の61次調査では、抜取穴をもつ柱穴(SA6630B)よりも古い、抜取穴をもたない柱穴(SA6630A)があって計画変更と解釈しており、これに対応すると見られる。

(箱崎和久)

表13 出土瓦磚類集計表

軒丸瓦		軒平瓦		その他	
型式	点数	型式	点数	型式	点数
6233Ab	1	6641	1	熨斗瓦	3
6273B	3	6641E	1	面戸瓦	9
6274Ab	1	6647A	1	ヘラ描き	2
6275A	2	6647Ca	1	磚	25
6279B	2				

3 出土遺物

瓦磚類 藤原宮期のものは丸瓦が588点(85.2kg)、平瓦が735点(94.94kg)、このほか軒瓦および道具瓦などが出士した。内訳は表13の通りである。軒丸瓦は5型式5種9点、軒平瓦は4型式3種4点を数える。

軒瓦は、ほとんどが包含層および東大溝SD105から出土し、藤原宮期の建物遺構にかかわるものはない。産地は、日高山瓦窯産と高台・峰寺瓦窯産のものが大半だが、特定の型式に偏ることがなく、傾向は把握できない。出土量は、大極殿や朝堂院地区と比較しても非常に少なく、これらは宮内の他の地区から流出した可能性が高い。

その他では磚が25点と特に目立つ。なかでも、長さ31.7cm、幅27.6cm、厚さ8.6cmの完形の方形磚は、一面に縦縄叩きを施し、この対面には粗く編んだ筵の圧痕を留めている。従って、底のない枠組みだけの型を筵に乗せ、その中に粘土塊を詰めて製作されたと考えられる。他の磚も摩滅や破損が著しいが、色調・胎土・焼成が似ており、同様の技法による製作である。磚の出土は、大極殿や朝堂院周辺の調査でも稀であり、用途は不明ながら、内裏関連の建物に伴う可能性がある。(石田由紀子)

土 器 多量の土器が出土した。なかでも、東大溝SD105の藤原宮期、A区の土坑SK10427~10429の古墳時代前期の時期に属する資料が特筆できる。ここでは、SD105中・下層の砂層出土資料の一部を報告する。

土師器杯A(1・2) いずれも内外面はナデ、外面は横方向にミガキをおこない、内面に放射二段暗文を施す。明褐色。1は復元口径19.1cm、器高4.5cm。2は底部に葉脈の圧痕が残る。復元口径19.0cm、器高4.5cm。

土師器杯B(3) 内外面にナデをおこない、外面は横方向にミガキ、内面に放射二段暗文を施す。底部を欠損するが、高台の剥離痕跡がある。黄橙色。復元口径19.6cm。

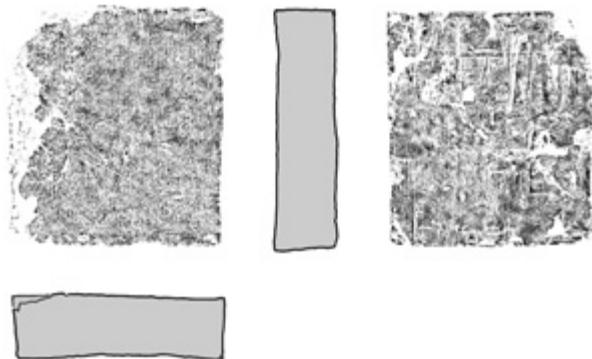


図74 138-2次出土磚 1:10

土師器杯C(4) 内外面にナデをおこない、外面は横方向にミガキを施す。褐色。復元口径16.4cm。

土師器皿A(5・6) いずれも内外面上半部をナデ、下半部から底部はケズリをおこなう。外面は横方向にミガキを施す。6は復元口径17.6cm。7は口縁部を内湾させる。復元口径23.8cm、器高2.5cm。

土師器蓋(7・8) 8は内外面ナデ後、外面にミガキを施す。明褐色。復元口径23.0cm。9はナデ後、外面に粗いミガキを施す。明橙色。復元口径15.8cm、器高3.0cm。

須恵器蓋(9~12) 9は外面を口縁端部の屈曲部まで回転ケズリをおこなう。灰白色。復元口径19.8cm、器高4.7cm。10は天井部に段をもつもの。灰白色。復元口径18.2cm、器高3.1cm。11は青灰色。復元口径17.1cm、器高2.5cm。12は回転ナデの起伏が細かく、端部が外側に反り返る特徴的な器形を呈するもので、尾張産(V群)と考える。黄灰色。復元口径15.6cm、器高3.3cm。

須恵器杯A(13・14) いずれも杯部内外面はナデ、底部外面は回転ケズリをおこなう。13は見込み部分静止ナデ。黄灰色。復元口径17.1cm、器高6.3cm。14は暗灰色。復元口径16.6cm、器高6.8cm。

須恵器杯B(15・16) 15は青灰色。復元口径12.8cm、器高4.9cm。16は杯部が高いもの。尾張産(V群)と考える。黄灰色。復元口径11.4cm、器高7.5cm。

須恵器皿B(17・18) いずれも内外面回転ナデ。見込み部分は静止ナデをおこなう。青灰色。17は復元口径28.8cm、器高3.8cm。18は復元口径26.7cm、器高3.7cm。

須恵器鉢(19) 内面および外面上半部を回転ナデ。外面下半部から底部に回転ケズリをおこなう。復元口径20.2cm、器高13.9cm。

(金田明大)

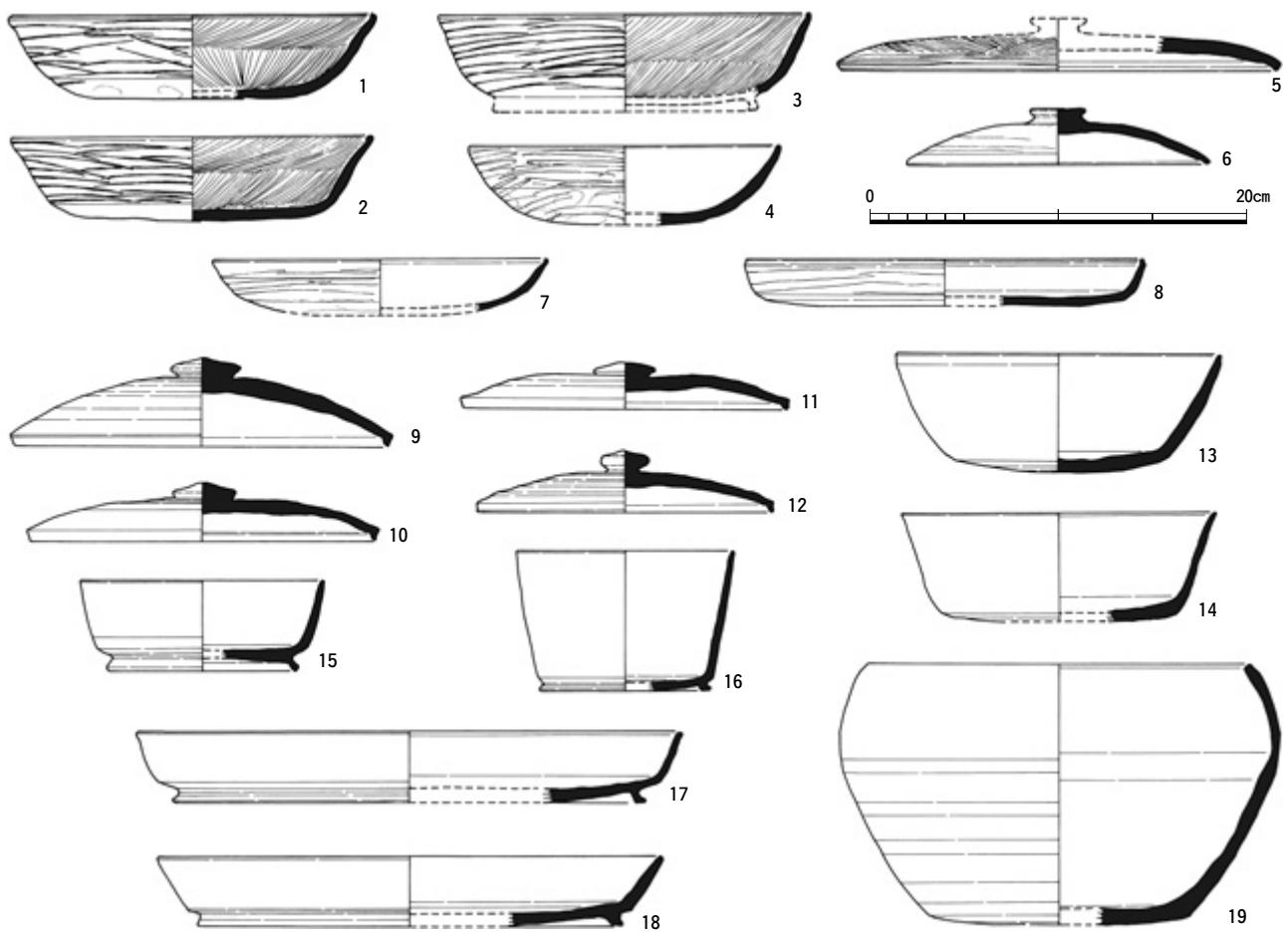


図75 東大溝SD105出土土器 1:4

4 成果と課題

東西に長い今回の調査区では、既調査区からつづく遺構を多数検出し、おおむねこれまでの成果を再確認することができた。

今回あらたに発見した重要な遺構は、A区からB区にかけてL字形に接続する南北壠SA10420と東西壠SA10440である。これまで藤原宮内裏中心部の構造はほとんど明確でなかったが、SA10420によって、内裏中心部のやや東に東西49.3m（南北壠SA10420-SA865間の距離）の区画があることが判明した。朱雀門-北面中門を通る藤原宮中軸線からSA10420までの距離は約103mであり、SA10420は内裏地区東半を東から約1/3を隔てる位置に建つ。柱穴の深さからみても、これらの壠は非常に重要な施設だろう。

さらにそれらの西方には石敷SX10430・10450が広がる。壠はないものの、敷かれた石の大きさの違いから石敷SX10430と礫敷SX10450には空間的な差があると考えられる。石敷の用途や区画内の機能など、他の都城との比較も含め、周囲の調査の進展を待ちながら慎重に検討

する必要がある。なお、壠に併行する溝SD10425・10445は、A区の土層観察から石敷よりも古いと解釈したが、石敷が溝より東に延びないという事実からは、施工時期は同じと考えることも不可能でない。

区画の内側では、少なくとも東西棟SB2230、東西棟SB2232、東西石組溝SD2233・南北石組溝SD10422の3時期の変遷がある、いずれも藤原宮期の遺構と見られ、区画壠を残しつつ、施設を更新していると解釈しておきたい。建物の建立直後に整地を施しており、SB2230建立後の整地（④層）は、比較的広範に及び、このときに東大溝SD105も埋められたようだ。

区画内の東西棟SB2230は身舎梁行3間に四面廂のつく建築で、これは平城宮内裏正殿SB450Aや長岡宮内裏正殿SB45000でも検出され、また平安宮紫宸殿にも用いられた内裏正殿特有の形態である。ただしSB2230の柱間寸法は7尺程度と小さく、内裏正殿に次ぐクラスの建物と考えられる。SB2230は、この区画の性格を考えるうえでも重要な遺構と言える。

以上から、今回の調査では内裏中枢部の一端を知る貴重な成果をあげることができた。
（箱崎）